

再履修経験がもたらす学習行動の変容とキャリア意識の再構築

－必修科目「キャリアプランニングⅢ」における実態調査より－

The Transformation of Learning Behavior and the Reconstruction of Career Awareness Resulting from Re-taking Courses

- Based on the Study of Actual Conditions in the Mandatory Course "Career Planning III" -

濱崎 あゆみ^{*1}, 大黒 章子^{*1}

Ayumi HAMASAKI^{*1}, Akiko OKURO^{*1}

^{*1} 明海大学 総合教育センター

^{*1}Meikai University of Educational Systems

Email: ahama25028@meikai.ac.jp

あらまし：本研究は再履修生支援の必要性が高まる中、必修科目「キャリアプランニングⅢ」を再履修した学生4名を対象に、学習行動とLMS活用状況の変容を3時点（初履修時・再履修中・再履修後）で調査したものである。結果、初履修では出席不足や課題未提出が主因であったが、再履修を通じてLMSの積極的活用や学習姿勢の改善が見られ、キャリア意識の向上や他科目への良影響も確認された。また、LMSの操作性や通知機能に関する改善の余地が指摘されている。再履修がやり直しではなく、主体的学習と内発的動機づけの転換点となり得ることが示唆された。

キーワード：適応的支援、ブレンド型学習、LMS、キャリア教育、授業実践

1. はじめに

日本社会は急速な少子高齢化と労働人口の減少に直面しており、その影響は高等教育にも及んでいる。特に、出席不良や成績不振などにより単位修得できず、再履修を強いられる「学修離脱者」（以下、再履修生とよぶ）への支援体制の整備が急務となっている。支援が不十分なまま大学からの中途退学に至るケースも少なくなく、これは個人の教育的損失にとどまらず、社会的損失にもつながる。

厚労省⁽¹⁾の調査では、大学等の高等教育を中途退学した直後の就業状況は「アルバイト・パート」が57.1%、「無職で何もしていない」が8.2%約となっており、約4.9万人の大学中途退学者が中途退学直後にアルバイト・パートまたは契約・派遣等の非正規として雇用されていることが推計される。大学を卒業せずに社会へ出た場合、就業機会や職業選択肢が制限されやすく、非正規雇用や不安定就労への移行リスクが高まることが明らかとなっている。

大学卒業者は企業における中核的人材として期待されており、中途退学はその供給源の減少を意味し、将来的生産性の低下や経済成長への悪影響が懸念される。そのため、再履修生の学修意欲やキャリア形成を支援する教育的枠組みの再構築が求められていると考える。

こうした背景のもと、本研究では3年次への進級要件必修科目である「キャリアプランニングⅢ」（2年次・後期履修）を2024年度に再履修した4名の学生を対象に実態調査を実施し、授業内容やLMS運用の改善点を明らかにする。

2. 先行研究

再履修生への支援に関する研究は、初年次教育を中心に着実に蓄積されている。井上・森⁽²⁾は、初年

次必修科目「ライフデザイン演習」において、再履修対象者の中には、学生生活への不適応や退学・除籍に至るリスクの高い学生が集約されていると述べており、小堀・齋藤・山本⁽³⁾は初年次科目において、参加意欲や授業評価の向上に寄与した実践例を提示している。また、大学のキャリア教育という観点において、Taylor & Betz⁽⁴⁾は、自己効力感の向上がキャリア決定行動を促進すると述べ、桑原・喜多・合田・根本・鈴木⁽⁵⁾は、キャリア関連科目の受講によって学生の進路意識や自律的学習意欲が高まることを明らかにしている。

また、LMSを通じた学修支援の有効性については、内田・大平・榎屋・丸山⁽⁶⁾は、LMSを十分に活用できない再履修生が存在することを指摘し、情報提示の工夫や学生側の自己管理支援が課題であると述べている。

これらの知見は、再履修生に対する支援の必要性やキャリア教育のアプローチからの有効性を示すものであり、重要な示唆を与えている。一方で、履修行動や学習意欲の変容を時間軸に沿って継続的に捉える研究は比較的少なく、LMSを媒介とした学習支援とキャリア意識との関係性を多面的に検討した実践的研究は限られている。

そこで本研究では、「キャリアプランニングⅢ」の再履修生4名を対象に、履修前・履修中・履修3ヶ月後の三時点での調査を行い、主体的学習への移行や発展科目履修といった行動変容を通して、再履修経験がもたらす内発的動機づけや自己効力感の再構築プロセスを明らかにすることを試み、既存の知見を補完しつつ、再履修支援の新たな視点からの授業及びLMSの改善を目的とする。

3. 研究方法

3.1 対象者

本研究対象者を、2024年度開講された「キャリアプランニングⅢ」を再履修し、単位取得した学生4名とする。対象者選定には、以下3つの理由がある。

第1に、当該4名はいずれも「キャリアプランニングⅢ」の学修に一度つまづき経験がある再履修生で、彼らの行動変容や自己効力感の再構築に向かう過程を追跡する事で、授業およびLMSの改善に資する示唆が得られると考えた。第2に、全員が翌年2025年度発展科目である「キャリアデザイン」(3年次・通年・選択科目)を自らの意思決定により履修しており、自律的学修意欲向上の有無を明らかにしたいためである。第3に再履修時には全員が授業中の学修活動およびLMS上での学習課題に継続的に取り組んでおり、記録データ(課題提出・アクセス履歴・ふりかえりシート等)が十分蓄積されていることから、履修時・再履修時における学修行動を比較するうえで有効であると考えた。

以上の理由より、本調査では再履修に至った要因や学習姿勢の変化、LMS活用状況、他科目への影響を明らかにした上で、授業やLMSの改善を目的とする。

3.2 調査方法

本調査は、2024年度に大学の必修科目「キャリアプランニングⅢ」を再履修した学生4名を対象に、アンケート及びインタビュー形式を用いて実施した。

アンケートでは、①前年度初履修時(2024年9月~2025年1月)②再履修中(2025年2月)③再履修後(2025年5月)の時点に分け、選択式質問と自由記述を組み合わせた質問形式にした。質問内容は、自らが考える再履修要因、履修前後のLMSの利用頻度、学習状況、意識変化などに関するアンケートを実施した。

4. 調査結果

本調査結果について(1)前年度の初履修時(2024年9月~2025年1月)(2)再履修中(2025年2月)(3)再履修後(2025年5月)の3時点に分類し、調査結果を述べる。

4.1 初履修時の状況と再履修に至った要因

再履修に至った要因は、「出席不足」が1名「課題未提出」が2名「成績不良」が1名であった。LMSについては、「確認していなかった」が1名「課題提出を失念した」が3名など自己管理面の課題が顕著であった。また、「グループワークが苦手」「席替えがストレス」といった授業運営に対する不安が学習回避行動につながっていたことも示唆された。

4.2 再履修時における行動変容とLMS活用の改善

再履修時には、全員が「出席する」「課題を期限内に提出する」「授業に積極的に参加する」といった学習行動を意識して取り組んでいた。LMS内の「コン

テンツ」についても、全員が「毎回授業前に確認した」と回答しており、提出物管理においても「提出期限を意識して行動した」との記述が見られた。

具体的には、スマートフォンのリマインダー機能で提出忘れの防止に活用する、講義前にLMS内の【コンテンツ】より授業資料を確認し課題の構成を授業前に考え授業参加する、講義中に重要だと感じた部分は『Googleドキュメント』の音声入力で記録し、授業後に内容を振り返り編集し課題提出するなどの工夫が見られた。これらの工夫により、主体的な学習姿勢と自己管理能力の向上が確認された。

4.3 再履修後の影響とLMSへの評価

再履修を経たことで3名が「他科目への良い影響があった」と回答し、出席率や提出意識の向上など学習態度の改善が確認された。全員がキャリア意識の変化を実感し、「就職活動に前向きになった」といった内発的動機づけの高まりも見られた。LMSの利便性は一定の評価を得た一方で、「メール通知過多」「スマートフォンからログインの煩雑さ」など改善要望も寄せられた。

5. 考察・まとめ

本調査の結果から、初履修時の出席不足や課題未提出、LMS未活用が再履修の主因であることが判明した。再履修時には行動改善が見られ、主体的な学習姿勢への行動変容が確認された。

また、学習態度の向上は他科目にも波及し、キャリア意識や就業意欲の高まりも示された。LMSには利便性と同時に改善の余地があり、今後の授業設計見直しが求められる。

参考文献

- (1) 厚生労働省：“第1回 今後の若年者雇用に関する研究会資料4 若年者雇用対策の現状について” <https://www.mhlw.go.jp/content/11801000/000548632.pdf> (2025.5.22 閲覧)
- (2) 井上義和, 森玲奈：“『ライフデザイン演習』再履修対象者の学修実態調査と授業改善-再履修クラスから考える初年次教育の課題-”, 帝京大学高等教育開発センターフォーラム, Vol. 6, pp. 69-85 (2019)
- (3) 小堀裕子, 齋藤山人, 山本守和：“再履修生を対象とした初年次教育に関する授業報告”, 日本大学FD研究, Vol. 10, pp35-42(2023)
- (4) Taylor, K.M.and Betz, N.E.:“Appli : cations of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision”, Journal of Vocational Behavior, Vol.22(1), pp63-81(1983)
- (5) 桑原千幸, 喜多敏博, 合田美子, 根本淳子, 鈴木克明：“初年次キャリア教育科目における相互評価学習の実践と進路選択自己効力の向上”, 日本教育工学会論文誌, 38(2), pp79-89(2014)
- (6) 内田瑛大, 平哲史, 槌屋洋亮, 丸山広：“情報リテラシー教育における学習支援のあり方を考える”, 青山インフォメーションサイエンス, Vol47, No1, pp 44-49(2019)